



町民文芸

只見短歌会 令和六年四月詠草

テレビ見て話しかけては苦笑するいつもの我は一人居なれば

馬場 八智

乙女等の集ひお遊戯してゐるがにシクラメンの花満開なりし

目黒 富子

世は花見茶の間和みぬ桜かなテレビ映像新聞紙上に

関谷登美子

頬染めて桜並木に走り出す息子の姿スマホに収む

立花 奏音

記録的暑さの春に桜咲けど忽ち花びら地面をおほふ

新国由紀子

今は無き会社の跡地に満開の色濃き桜碧空に映ゆ

渡部ヨリ子

只見俳句会 四月定例会

日高俊平太 指導

春分やゆったりゆたり鯉の口
冴返る小川の底の見え隠れ

都

古籬や今は納戸に収まりて
啓蟄や土の重みを計りたき

味代子

小正月神楽早乙女舞い込み来
春呼べり神楽囃子と子等の声

真理子

卒業歌時代と共に変わり行く
寒どむと隣に空家がもう一軒

睦子

山泥を運べる雪解川細し
春の土薄き光のさしにけり

紺青

雪とけて右の手袋おちこちに
としよりの葬の段取二月尽

恒夫

水紋の重なりひろぐ春の雨
晴れ渡る山の窪みに残る雪

礼

隣組手造り持ち寄り花の下
冬囲い外して空の広がりぬ

一穂

闇夜から怒涛の響き春出水
玄関の長靴置き場隅に変え

修一

蔵並ぶ夕暮れの街や桜散る
微睡むや桜吹雪のローカル線

信

